

2018 年度 一食福島復興・被災者支援 助成事業一覧

団体名/活動拠点	申請事業名	申請内容
甲状腺がん支援グループ・あじさいの会 (会津坂下町)	小児甲状腺がん患者・家族の保養および情報共有事業	1) 甲状腺がん患者の交流および保養(概ね2ヶ月1回程度) 2) 検討委員会・学会会議などへの参加(年10回程度) 3) 治療・生活情報の提供・啓発
みんなのデータサイト(福島県)	放射能汚染をデータに基づいて解説し、暮らしに生かせる理解を促進するプログラム	2018年8月に土壌測定マップを中心に放射能汚染情報を総合的に解説する「アトラス版」(仮称)を出版し、各地でその冊子を使った伝達ワークショップを行っていく。 ・放射能汚染情報をwebでも、市民測定・公的データの両方で解析し、できるだけ事実に基づいてわかりやすく解説していく。
「フクシマの声を全国に、世界に届ける」実行委員会(東京都)	写真展と講演・ワークショップによる福島理解プロジェクト	本年度は豊田直巳の写真展『フクシマの7年間～尊厳の記録と記憶』の開催に合わせて豊田直巳または被災者・避難者による公開の講演+ワークショップを実施する。 5月4～11日 神奈川県 かながわ県民センター展示1階 7月12～26日 東京都 公益財団法人早稲田奉仕園 8月8～12日 三重県 フォトジャーナリズム展三重 8月15～19日 京都府 町家 Gallery cafe 龍 10月上旬 東京都 大田区 会場未定 10月下旬 東京都 品川区 会場未定 2019年初頭 京都府 立命館大学平和ミュージアム 初頭 埼玉県 原爆の図・丸木美術館
認定NPO法人エフ・オー・イー・ジャパン(東京都)	福島ぽかぽかプロジェクト	①猪苗代町のシェアハウス「ぽかぽかハウス」と南房総にて、保養ができるよう支援・運営を年7回実施する。また、自主保養として、参加者自ら企画運営する保養プログラムを年3回支援する。②福島市で暮らす中高校生、避難や大学のために福島を離れた大学生を中心に、環境問題やエネルギー問題を入り口に、グローバルな視点に立って原発事故を考えていく学習会の実施。それに関する調査、勉強会、研修旅行の開催等
東日本大震災・山梨県内避難者と支援者を結ぶ会(山梨県中央市)	「フレンチ・ブルドッグの会」運営事業	山梨県内で東日本大震災と原発事故の福島県からの避難者がもっとも多い中央市において、避難者の孤立防止や相互の情報交換・交流機会を提供する。H30年4月より月1回の開催を基本(年間11回開催)

<p>特定非営利活動法人福島県有機農業ネットワーク (二本松市)</p>	<p>福島県の農家を巡るスタディツアー及び農と食の学校事業</p>	<p>復興の進行具合によって違う農家の状況を現地で直接聞くことで、地域や農業の復興について考える機会を作る。また県内の特徴ある農産物を生産する農家に、10名程度の農業体験希望者を派遣し、年間4回、同じ農家で同じ作物の栽培から加工、消費までを体験する。それぞれの作物の名前を冠して、〇〇の学校とする。これらの総括として首都圏にて3月に合同交流会を開催する。</p>
<p>特定非営利活動法人ふくしま30年プロジェクト (福島市)</p>	<p>福島県内外避難者との交流会をとおして繋がり維持と、国外への情報発信による長期活動基盤整備事業</p>	<p>① 福島県内外で合計五回の交流会を行なう。 福島市内で小児科医師との学びの場を提供する交流会を二回行なう。 首都圏などに自主避難している方々を対象に、福島県内を取り巻く最新の状況や放射線の測定データを伝える交流会を三回行なう。 ② 弊法人の培ってきた測定技術や測定機器を活用し、専門家も招きながら子どもたちにもわかりやすい形で放射線についての学習会や、測定体験プログラムを開発し実施する。 ③ 2017年度に作成した海外版のパンフレットを基にして海外版サイトを作成し、より広い情報発信を行う。</p>
<p>はみんぐ Bird (郡山市)</p>	<p>「わたしに戻る日アートプロジェクト第6弾」答えはない美術の面白さを通して「世の中を生きる面白さ」を発見する活動</p>	<p>1:武蔵野美術大学の卒業生のチーム4名とはみんぐ Bird で美術の面白さに触れるワークショップ 2:アートカフェの併設 (はみんぐ Bird でカフェブースを設置しアートに触れた思いや暮らしに感じる思いなどを気軽に話す場所を提供する。</p>
<p>特定非営利活動法人市民科学研究室 (東京都)</p>	<p>福島県からの避難を理解するための福島県外での中学・高校・大学生向け教育 (ワークショップ) プログラムの開発と実践する活動</p>	<p>県外避難した人びとは被害への無理解や誤解から偏見にさらされやすい状況は、むしろ強くなっていると言える。この現状を打開する一つの手立てとして、中学生、高校生、大学生らの若い世代が、避難者と直接語り合うことを契機にして、原発事故がもたらした状況を正しく認識・理解し (そこに放射線に関する科学的理解も含まれる)、自ら対処していく力を身につけることを、本事業は狙っている。 ①ワークショップの中身と方法のブラッシュアップ ②原発事故問題・避難問題を語る、予備的なサロンの場を設ける ③ワークショップの実施とその報告の掲載 ④ワークショップ事業のとりまとめと報告会の実施</p>